

「札音杳遼東軍也」の音義を有する該書は、幸にして此の場合に用い得べきものたることを報告するを躊躇せざるなり、余もとより版刻のことに昧ければ、發行の年月を附せざる余が藏書に就いて漫りに板式體裁等の上よりかく斷ぜんとするには非ず、また斯道の大家の鑑定を請ひたるにも非れど、然も此の書には卷頭に序文を付せる朱氏竹垞の藏書印兩個ありて明らかに往日其の書庫に收められたるものなるを示せり、然るに彼の死歿は康熙四十八年八月なれば、此の書が同四十五年四月に、彼の序を付して出板せられてより僅かに三年餘に過ぎず、此の僅少の年月の間に之が板を變へて行はれたりとは思はれざれば、彼が序文を付せる關係等と併せ考へて、必らず其の初版本たるべきを疑がはざるなり。此の如きを以て余は學士の注意を與へられたるに係らず、依然として「札音杳遼東軍也」の音義は邵氏の付せるものと見、而して單行本元史類編に載する所は之を誤りたるものなるを信じて疑はざるなり。

(三) 此の項に於ては、またさきに引かれたる遼史語解の記事について、其の失檢を認められたるに過ぎず。

(四) 此の項に就ては便宜上(六)の項に於て併せ論ずべし。

(五) 此の項に於ては余が札には軍名もしくは軍の解釋こそあれ sagor, sari, cherig 等に相當する戰なる解釋は絶えて存せず、女眞語にても戰は瑣里 (sari) にして軍に對しては別に鈔哈 (cooha) なる語を用いたり、然る